

研究会・部会・ 委員会・分科会	活動ビジョン・ゴール	年度目標	進捗・課題	予定・行動計画	関連団体等
食品安全研究会					
食品微生物研究部会	<p>食品産業会が抱える食品微生物関連の共通課題を、部会員が協同で(企業の枠を超えて)研究し解決を目指す。</p> <p>食品関連企業の微生物担当者が業務上の悩みや課題を相談・共有し相互解決できる場として機能する。</p> <p>当部会の研究成果を含む食品微生物に関する安全性等の情報について、広く周知活動を行う。</p>	<p>部会員が集まり定期的に交流や情報交換を行える場としての部会運営の再整備(アフターコロナ対応としての集まる場の整備)</p> <p>新規研究PJの立案および他機関との積極的な連携の実施</p>	<p>【全体】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・8月5日にオンライン部会を開催。部会運営方針を再定義して展開。また、部会員が部会活動を通して獲得したい事柄についてヒアリングを実施。今後の活動に反映する。</li> </ul> <p>【分科会活動】</p> <p>(1) 芽胞菌研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・飲料の危害微生物に関する分科会メンバー間の情報交換会を7月16日にオンラインで開催した。次回は10月中旬頃に開催予定。</li> </ul> <p>(2) MALDI-TOF MS 研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・分科会の発足目的が十分に達成されたことを関係者間で確認し、活動終了を決定した。</li> </ul> <p>(3) チルド勉強会</p> <p>a. ボツリヌス菌接種試験活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動なし(追加試験について日本缶詰びん詰レトルト食品協会にて調整中)。</li> </ul> <p>b. 耐熱性試験法検証活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・検証試験の対外発表に向け、7月10</li> </ul>	—	

			<p>日に Web 打合わせ実施。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・検証試験結果を取り纏め、日本缶詰びん詰レトルト食品協会技術大会の演題として登録。</li> </ul> <p>(4) 国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・進捗無し。</li> </ul>		
食品リスク研究部会	食品の安全性評価の考え方を学び、その普及に努める。	<p>① 食品リスク研究に関する勉強会を3回以上開催し、情報発信する。</p> <p>② 「ナチュラルミステイク」の情報発信。</p>	<p>① 8月29日に第1回勉強会をハイブリッド開催した(会場:森下文化センター)。「食品添加物 二酸化チタンの安全性を取り巻く状況」と題して、国立医薬品食品衛生研究所の小川久美子先生と畝山智香子先生にご講演いただいた(有料参加者26名)。</p> <p>② 同日、部会を開催し、第2回勉強会は、「食品・食品添加物のアレルギー性評価について」のタイトルで手島玲子先生に、第3回勉強会は、「食品安全に関する消費者意識の変遷 — 今、食品企業に求められること —」のタイトルで森田満樹先生にそれぞれご講演いただくこととなった。</p>	勉強会予定 第2回:10月30日(水) 第3回:12月9日(月) 場所はいずれも森下文化センター及びWebのハイブリッド	
香料研究部会	食品香料の性質と安全性等に関し偏向の無い科学的な調査研究を行う。食品香料に	—	—	—	

	関する正しい科学的 共通理解を産・官・学 に普及させる。				
食品領域の動物実験代替推進プロジェクト (AAT プロジェクト)					
全体進捗	<p>&lt;活動目的&gt;</p> <p>1) 動物に依存しない、毒性発現機序に基づいた、ヒトへの予測性のより高い評価アプローチを確立し、食品の安全性および機能性評価の精緻化・効率化を進展させること。</p> <p>2) 動物愛護の世界的潮流の中で食品領域の取り組みを加速させること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究 WG テーマ推進による評価技術基盤並びに評価戦略構築とケースレポートの作成。</li> <li>情報収集・発信（国際ワークショップ内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催）。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>前回の全体会議（6月5日）で、外部発表（第37回日本動物実験代替法学会一般演題発表）を決定。学会発表準備会議を新たに設置。7,8月に3回の会議を行い、発表概要（演題、発表者、発表内容骨子等）について議論し決定。準備を進めている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月20日にプロジェクト全体会議を開催予定（外部会議室（森下）&amp;Web）。</li> </ul>	
体内暴露予測ワーキンググループ (WG)	食品成分の体内曝露を、動物を用いずに予測する手法の開発推進と現場実装	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 昭和薬科大学山崎研に構築した in silico 動態予測モデルの実装</li> <li>② 新規腸管吸収予測ツールの適用性把握</li> <li>③ ケースレポート対象化合物の</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① in silico 動態予測モデルのガイダンス作成を進めた。また、本モデルの適用範囲について、これまで食品成分について検討してきたケミカルスペースと FaFg の考慮は医薬品成分等の非食品成分についても同様に予測精度向上に繋がることを確認した。本知見を踏まえ、ガイダンスの作成を進める。</li> <li>②, ③ 進捗なし</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① in silico 動態予測モデルのガイダンス作成に向け、以下対応を引き続き進める。特に、本モデルの詳細の使用方法などの説明文書作成に着手し、ガイダンス案完成を目指す。</li> </ul>	

		体内曝露予測			
データベース WG	食品成分の既存毒性情報(文献等)を収集、活用し、反復投与毒性を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集することも検討する。	有害性評価支援システム統合プラットフォーム (HESS) を用いた食品成分毒性試験データベース及び使用ガイダンスを含む毒性予測手法の AAT 参画メンバーへの公開	昨年までに構築した食品成分の毒性試験データベース (176 種) の有用性検証を目的に Read-across の予測結果と原著論文を用いて POD やターゲット臓器の予測の妥当性検証を実施。合わせて 176 種のデータベースの公開をもって本 WG の活動を一旦完了とすることで合意済。データベースの HESS への登録や、論文データの商業利用・知財の課題について、引き続き検討中。	データベースの公開に向け、商業利用の課題について対応継続 (有償文献由来のデータの掲載可否確認、データベースの順次登録検討等)。	
ケースレポート WG	NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略を具体化させ、体内曝露予測 WG とデータベース WG の活動と協力し、in vitro assay 系を加えたリスク評価戦略を作成し、ケースレポートとして発信する。	第 1 弾のケーススタディは「肝障害」をテーマとし、ラット肝細胞を用いた試験から in vitro PoD を求め、評価スキームの妥当性を検証する。	植物アルカロイドの riddelliine を評価対象とし、BMD 解析 (EFSA Bayesian モデル) を用いて評価スキームの検証を実施中。また、BMD 解析手法の妥当性の検証を、ラット in vitro と in vivo、ヒト in vitro と in vivo とに分けて実施中。妥当性検証の対象化合物は、ラットでは壊死等の肝毒性の報告のある化合物、ヒトでは肝障害の症例報告のある医薬品とし、既存のデータベースや文献情報から選択した。検証方法は、in vitro では Bayesian BMD 解析にて算出した BMDL を、in vivo で	ラットおよびヒトでの検証を実施することで評価手法の課題を抽出し、外部専門家と連携しながら設定した評価戦略の妥当性の検証を進める。Riddelliine および既存化合物で検証結果をまとめ、第 37 回日本動物実験代替法学会(2024 年 11 月 29 日~12 月 1 日)での発表に向けた検証を進め、選択した化合物の毒性発現機序や細胞種の特徴等から課題を抽出する予定。	

			は肝障害のみられた用量における曝露濃度予測値をそれぞれ PoD とし、両者を比較することで進めている。併せて、発表を計画している第 37 回日本動物実験代替法学会 (2024 年 11 月 29 日～12 月 1 日) へのエントリーと抄録の提出を行った。		
企画運営 WG (国際ワークショップ & シンポジウム WG より変更)	動物実験代替法における各国の技術・規制動向に関する情報を発信することにより、食品業界における代替法の開発や取り組みの推進を促す。	評価技術に関する情報を収集しプロジェクト内へ共有すると共に、プロジェクトの活動内容を学会やワークショップ等を通じて発信する。	食品の機能性評価における動物実験代替法の活用について、専門家の先生による講演会を企画している。第 2 回目は 2024 年 9 月 19 日 (木) に筑波大学の市川先生より「食品の消化特性を評価するヒト胃消化シミュレーターの開発と応用」と題して講演いただく。第 3 回目の演者として、群馬大学の佐々木先生に講演を依頼し承諾をいただいた。現在は講演内容の具体化や案内文書作成等の準備を進めている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>講演会へ向けた佐々木先生との事前打ち合わせ。</li> <li>食品安全委員会による勉強会の開催準備。</li> </ul>	
<b>研究会・部会・委員会・分科会</b>	<b>活動ビジョン・ゴール</b>	<b>年度目標</b>	<b>進捗・課題</b>	<b>予定・行動計画</b>	<b>関連団体等</b>
バイオテクノロジー研究会	バイオテクノロジーを用いた持続可能な食料の安定供給への貢献を念頭に、バイオテクノロジーの重要性の理解を深め、バイオテクノロジー応用	<ol style="list-style-type: none"> <li>ERA プロジェクト調査報告 (年 4 回)</li> <li>バイオテクノロジー応用微生物を利用して発酵生産された食品・</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>次回定例会は 9 月開催</li> <li>植物バイオテクノロジー報告書 No. 67 の発行の準備</li> <li>組換えナタネ論文原稿の最終化、投稿、レビュワーからのコメント対応</li> <li>精密発酵の事例、各国の規制状況の</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>植物バイオテクノロジー報告書 No. 67 の発行、配布</li> <li>植物バイオテクノロジー報告書 No. 68 のレビュー、発行準備</li> <li>組換えナタネ論文アクセプト</li> <li>精密発酵の事例、各国の規制</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>農林水産省</li> <li>消費者庁</li> <li>内閣府食品安全委員会</li> <li>環境省</li> <li>文部科学省</li> <li>経済産業省</li> <li>筑波大学環境系 &amp; つくば</li> </ul>

	<p>食品・作物・添加物等の安全性・活用に関する調査研究と情報提供を産・学・官連携及び国際的ネットワークを通して推進し、科学的根拠に基づく国際的に調和した安全性評価法や活用法の発展に貢献する。</p>	<p>食品添加物等の安全性に関するワークショップ</p> <p>3. 第 16 回 ISBR ( International Society for Biosafety Research)2023 への安全性評価の専門家の派遣</p> <p>4. 遺伝子組換えナタネの ERA に関する研究成果の論文発表</p>	<p>調査</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2024 年度高度精製品ワークショップ企画準備</li> </ul>	<p>状況の調査</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>第 17 回 ISBR2025 専門家派遣のプロジェクト化可否の審議</li> <li>2024 年度高度精製品ワークショップ開催</li> </ul>	<p>機能植物イノベーション研究センター (T-PIRC)</p> <p>明治大学農学部</p> <p>国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 (農研機構) 作物研究部門</p> <p>横浜国立大学大学院環境情報研究院</p> <p>千葉大学大学院園芸学部</p>
--	--	--	---	--	--

栄養健康研究会

<p>栄養研究部会</p>	<p>「健康寿命延伸」はグローバルな持続可能な開発目標 SDGs の目標 3「すべての人に健康と福祉を」に合致することから、「健康寿命延伸」をキーワードとした活動を継続する。</p>	<p>「健康長寿延伸」のための最新のエビデンスを継続して発信していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>公開セミナー(有料)を Zoom ミーティングで 1 年に数回開催する。</li> <li>セミナー参加登録者に対しては、オンデマンド配信を実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>6 月 19 日に開催した第 4 回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは：老年期編」のオンデマンド配信を 7 月 1 日～7 月 31 日に実施した(視聴回数 53 回)。本セミナーの講師と演題は以下の通り。</li> <li>成田美紀先生 (東京通信大学 人間福祉学部)「健康寿命の延伸に向けた老年期の栄養・食生活の在り方を再考する」</li> <li>清野諭先生 (山形大学 Well-</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2024 年度の公開セミナーシリーズは第 4 回で一旦終了し、今後はできる限り対面で部会を開催し、2025 年度以降の活動について議論を継続する。</li> <li>2024 年度第 5 回部会を 9 月 20 日 (金) に花王(株)すみだ事業場 (墨田区) にて、第 6 回部会を 10 月 25 日 (金) に森下文化センター (江東区) にて開催予定。</li> </ul>	
---------------	---	---	--	--	--

			Being 研究所)「これからの高齢者の身体活動・運動のあり方を考える：最新のガイドライン等を踏まえて」		
GR プロジェクト	食品・食事の血糖応答性の簡易評価法（GR法）の確立と普及	GR法の確立・発表論文発表 他施設研究を基礎とした測定系の安定化および簡易化を目標とする	低GI食品を含めた代表的な食品のGR値の測定ならびに測定の安定化を図るための詳細条件の検討を進めた。	論文再投稿準備 GR法詳細条件の検討 GI値との比較検討	昭和女子大学 食健康科学部 健康デザイン学科 日本食品分析センター
茶類研究部会・茶情報分科会	茶樹に係わりその成分の世界的な多様さ、飲料その他商品に係わり各種茶成分の機能性、研究・開発・商品化等につき会員相互間の情報交換を深めると共に、外部からも情報を得る。	—	—	—	
CHP (Center for Health Promotion)					
Project PAN (Physical Activity and Nutrition) “身体活動と栄養”プロジェクト	超高齢化が進む国内において、働きざかりの人々や高齢者の健康維持を支援する、運動と栄養の複合プログラムの開発と実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ ヘルシーエイジングのためのプログラムの開発・普及</li> <li>➤ 介護予防教室の開催（自治体、社会福祉協議会、企業）</li> <li>➤ 地域リーダーの育成（大学、</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 原著論文発表 「Dietary variety and nutrient intake among Japanese community-dwelling older adults: A cross sectional study」 Kimura M, Moriyasu A, Miyazaki R. Aging and Health Research に掲載</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ ホームページリニューアル</li> <li>➤ 墨田区委託事業「すみだテイクテン」秋教室</li> </ul>	石巻専修大学 鹿児島大学 島根大学 札幌医科大学 東京都健康長寿医療センター研究所 国立健康・栄養研究所 国立健康長寿医療センター

		<p>社会福祉協議会、シルバー人材センター)</p> <p>➤ 論文等、科学的成果の発信</p>	<p><a href="https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S2667032124000210">https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S2667032124000210</a></p> <p>➤ 共著原著論文発表</p> <p>「Associations of Eating Out and Dietary Diversity with Mild Cognitive Impairment among Community-Dwelling Older Adults」Kiuchi Y ら Annals of Geriatric Medicine and Research に掲載</p> <p>➤ 内閣府 戦略的イノベーション創造プログラム (SIP) 第3期「包摂的コミュニティプラットフォームの構築」課題 D 「障がい者・高齢者の生きがい向上策」へ協力参加機関として参画</p>		<p>ー</p> <p>墨田区</p> <p>横浜市社会福祉協議会</p> <p>岩国市社会福祉協議会</p> <p>吉賀町社会福祉協議会</p> <p>津和野町シルバー人材センター</p> <p>益田市シルバー人材センター</p>
<p>Project DIET (Dietary Improvement and Education with TAKE 10!®)</p> <p>“途上国栄養改善と栄養教育”プロジェクト</p>	<p>途上国、新興国における官民連携の栄養改善の取組み「栄養改善事業推進プラットフォーム」(NJPPP) のプロジェクトとして、工場など職場の栄養改善プロジェクトを東南アジア各国で推進。</p>	<p>➤ フィリピン：「フィリピンの栄養強化米プロジェクト2022 (調査研究)」</p> <p>2024年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。</p>	<p>➤ 本年度プロジェクト実施せず</p>		<p>✓ Food and Nutrition Research Institute (FNRI: フィリピン食品栄養研究所)</p>

		<p>➤ ベトナム：「ベトナムにおける野菜の摂取行動に影響を与える要因調査」ビジネスモデル構築、並びに2024年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。</p>	<p>➤ 本年度プロジェクト実施せず</p>		<p>✓ National Institute of Nutrition (ベトナム栄養研究所)</p>
		<p>➤ ミャンマー：「完全オンラインによるブロックチェーン技術を応用した職場における栄養教育」栄養教育推進に焦点を当てたビジネスモデル構築に向けた展開を計画。</p>	<p>➤ 本年度プロジェクト実施せず</p>		<p>✓ National Institute of Nutrition</p>
		<p>➤ インドネシア：「インドネシアにおける健康的な食事の普及に関する</p>	<p>➤ 本年度プロジェクト実施せず</p>		<p>✓ ボゴール農科大学 (現 IPB Univ.)</p>

		る調査 2022」 ビジネスモデル構築、並びに2024年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。			
CHP 全体	日本の産・官・学界に蓄積された栄養学、医学、公衆衛生、衛生環境等の分野における科学的知識および技術を、国内および世界的に共通な課題の解決に活用し、SDGsに基づいた社会貢献を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ SUN Business Network Japan (仮称：SBNJ) 事務局機能誘致に向けた活動継続。</li> <li>➤ SDGs 貢献プラットフォームの形成。</li> </ul>	➤ 進捗無し		
<b>研究会・部会・委員会・分科会</b>	<b>活動ビジョン・ゴール</b>	<b>年度目標</b>	<b>進捗・課題</b>	<b>予定・行動計画</b>	<b>関連団体等</b>
国際協力委員会	アジアの ILSI 各支部間の交流による食品法規動向及びリスク評価等の情報収集・共有化と ILSI Japan 関係者への成果報告	9月19~20日開催 予定の Asia Life Sciences Institutes Network (ALSIN) 会議(アジア地域 ILSI 支部との情報交換会)への参加、 情報交換	<進捗> 1. 7/22 委員会開催 ・ ILSI 台湾訪日対応：結果報告 ・ ALSIN 会議対応：発表テーマと発表者の確定 * 各自で準備を進め、次回委員会で内容を共有することとなった。	1. ALSIN 会議に出席する。 2. 委員会を開催し、今後の計画を話し合う。 3. 参加者内で分担し「イルシー」誌への投稿を行う。	

			<p>2. 8月27・28日 委員会開催(Web)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ALSIN 会議対応：各担当者による発表資料の内容紹介</li> <li>* 締め切りに合わせ内容を確定し委員会内でも共有することとした。</li> </ul> <p>&lt;課題&gt;</p> <p>① ALSIN 会議対応</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 発表テーマ・発表者の確定</li> <li>・ 発表内容の確認</li> <li>・ 「イルシー」誌への投稿</li> </ul>		
食品機能性研究会・AI栄養・機能性研究部会					
AI デイアトロフィ研究部門分科会	数千分子種よりなる食品摂取によるヒトの代謝状態を最新のコンピュータ技術と計算科学を活用し、高速で安価に食の機能性・安全性を予測するAIシステムを構築する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 代謝モデルの領域拡大</li> <li>・ 機能伝達経路のイジングモデル</li> <li>・ AI教育</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第2期スタートに向け、参加企業勧誘継続（現在5社）。</li> <li>・ 東北大学 NICHe との契約締結に向けた草案を送付。</li> </ul>	研究講座開始に向けたオリエンテーションを10月に開催へ。	東北大学未来科学技術共同研究センター (NICHe: New Industry Creation Hatchery Center, NICHe) 東北大学大学院農学研究科
情報委員会・編集部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 調査・研究活動とその成果の発表</li> <li>・ 科学情報の普及</li> <li>・ 国内外の関連機関との交流・連携</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 活動報告配信（年6回）</li> <li>2. 機関誌「イルシー」の発行（年4回）</li> <li>3. 「栄養学レビュー」誌の発刊</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 活動報告 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2024年5,6月分配信（7月）。</li> </ul> </li> <li>2. 「イルシー」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 159号：発行、ホームページ掲載、お知らせメール配信（8/9）</li> <li>・ 160号：編集中（2024年11月発行予定）</li> </ul> </li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 部会活動報告の配信（1月、3月、5月、7月、9月、11月）</li> <li>2. 機関誌「イルシー」の発行（2月、5月、8月、11月）</li> <li>3. 「栄養学レビュー」誌の発刊（2月、5月、8月、11月）</li> </ol>	

		(年4回)(女子栄養大学出版部との共同事業) 4. 種々出版物発刊のコーディネーター 5. ホームページ改定	3, 「栄養学レビュー」誌 ・125号:2024年8月発行 ・126号(=最終号):編集中(2024年11月発行予定)	月)	
--	--	--	---	----	--

【事務局からのお知らせ】

理事会	<p>2024年第5回理事会(7月17日開催)</p> <p>1. 理事会体制の強化 新理事候補者5名が推薦により選任され、特に異議なく決議された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 新理事の所属先と氏名は次の通り。東京大学 佐藤隆一郎様、東京農業大学 上原万里子様・小西良子様、国立研究開発法人農研機構 大池秀明様、東北大学 戸田雅子様。</li> </ul> <p>2. ILSI SEAR(イルシー東南アジア地域支部)との協力体制</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ILSI SEARより共同プロジェクト提案があり報告。ILSI SEARに所属していないILSI Japan会員企業を対象にアジア地域でのネットワークを構築し、主要な科学のおよび優先的トピックスやASEAN市場への展開に関連性と影響を与える規制の展開について学ぶことを趣旨としたもの。具体的な説明が無いので賛同は難しいとの意見が出て、再度確認することになった。</li> <li>● 共同プロジェクトのテーマについて、① マイクロバイオーム、プレ・プロバイオティクス、② 各国法規フォローアップ、等の提案あり。今後具体的にどういう連携が可能か考慮する。</li> </ul> <p>3. ILSI Japanの財務体制について報告</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ILSI JapanとILSI Japan CHPとに分け、収入の他、人員及び給与、経費の内容を説明した。CHPについては、人件費を支払うためには収入が最低7百万円/年必要。</li> <li>● 来年度以降のCHP事業に関して説明した。フレイルやMCI(軽度認知障害)に興味を有する会員企業に参加を募る提案をした。理事から様々な質問や意見が出た。活動を継続するには、サポート企業をさらに開拓するか、またはILSI Japanの研究部会と同様にテーマを出して会員から参加を募るか、どちらかであるとの結論に達した。</li> </ul>
事務局	<p>1. 島田理事面談(7/25, 8/8)</p>

- |  |   |
|--|---|
|  | <ul style="list-style-type: none"><li>● 農林水産省補助事業取得に向け、ILSI Japan のこれまでの活動状況、現在の能力について情報提供。農林水産省の関連部署にて、情報入手を約束いただいた。</li><li>● 農林水産省において、新事業・食品産業部、消費安全局等、関連部署を訪問され、ILSI Japan 理事として担当者と面談されたとの報告を受けた。</li></ul> |
|--|---|